

青髭4

明宏訊

ギョイエン又従子爵家は、代々カルッカソムの伯爵家に仕える家老家である。父親である、ジョフロア4世が旅立った今、主であるカルッカソム伯爵の許可を得て、その家督を継ぐのは嫡男であり、その上、それを言葉によって遺した、という重大な事実によって、アンリが継承することはごくあたりまえのことだった。

しかし、彼の親族たち、具体的には爵位継承権にして、第二位と三位を持ち合わせる、ルイとギョームとしては一言も二言も言わざるを得ない、そういう状況なのである。

儀式が更けた後の一族の祈りの場所である公会堂に、いま、言葉を投げかけているものは、しかし、星空の中で王位を主張する三日月だけだった。ステンドグラスを透して降ってくる光は、しかし、直射月光よりもむしろ重々しく感じられる。それは、建物がものがたる時代の重みがそうさせるのだろうか。それに助けられたのか、従子爵家のなかで最初に口を開いたのは、次男ルイだった。

「兄上…お話があるのですが……」

しかし、表面上だけは長幼の序を護ろうとするところなど、かつて、短気だけが売り物だった彼らしくない。成長したものだ。アンリは、いささか意地悪な気持ちでじたいを観察しはじめていた。この10年間でどんな時間を過ごしてきたのか、とくと見てやろうではないか。

「私は…納得できかねます……」

声変わりしたとはいえ、そして、けっして、自分に対して友好的な態度ではないとはいえ、やはり昔日の面影のある、懐かしい弟の声だった。

ルイは、椅子に座らずに体重を腰かけに預けている。だが、その一言ともに、おそらくは、この10年を、武人として精進することに人生をかけてきたのだろう。その全身から激情が迸っている。兄として頼もしく思う一方、時代遅れを否定することができない。時代は青い血に戦争以外の何かを求めている。それを理解できないとはなんと浅はかなことか。

次男はついに体裁を保つことに我慢できなくなったのか、心情を露呈しはじめた。

「あなたは、この家を継承する資格がない！！いや、この場にいる資格すら、ない！」

しかも、はやくも敬語が崩れた。アンリは、心のなかでほくそ笑んだ。彼は、この10年間でただ過ごしてきたわけでない。今となってみれば、あれも運命だったといえるかもしれぬ。王都ナルボンヌにて最上級貴族の家に伺候し、その内情を具にみてきたことは、これからのことに力となっていくことは疑いを入れないのだ、すくなくとも、そう思いたい。

アンリは、弟を見据えた。

ルイは、ただ、それだけでたじろいでしまった。危うく、手を滑らせるところだった。それを押し隠そうとするからさらに余裕を失う。

だが、これ以上、彼を追い詰めることに意味があるとは思えなかった。問題は、葬礼が終わってからずっと押し黙ったままにいるギョームである。いったい、何を考えているのか、目を瞑ったまま手を組んで巨大な扉に身体を預けている。ほっそりと見えるが、それは頑丈な武人で目抜き通りをいく次兄ルイと比較するからであって、彼も、あくまでも青い血の持ち主であって本質は

騎士に他ならない。当然のことだが、この場にいる女性たちに比べれば武人としての体軀として十分に認められるだけのものを持っている。

アンリは、この弟に問いかけた。

「ギョーム、そなたも他意があるのだろうか？」

「……兄上、私は考えていたのですよ、これまでエウロペにおいて何度このような状況が繰り返されてきたのでしょうか？」

「一族の継承のことか？ミラノ帝国も入れて、それは数えきれない、まさに夜空に瞬くほどもあるだろう……」

何が言いたいのかと兄は美貌の弟に視線をうつす。従子爵家の三男は遠近法に従って巨大化すると、畳みかけた。

「法によって決められているはずですが、第二継承権と第三を持ち合わせるものたちが団結すれば、陛下に異議を申し立てられると……」

「ギョーム、何を言うのです？控えなさい！」

今まで黙って聴いていた母親、アデライードがやおら立ちあがった。ギョームの美貌はこの人の血筋だと誰の目にも明らかだろう。いま、そんなことを考えている自分を、アンリは素直に呑気な奴だと自嘲した。

「母上！あなたは黙っていられるのですか？兄上が何をなさったのか？！どうしてそこまで寛大でいられるのですか？」

さすがに、ギョームとて冷静を装っていられなかったらしい。さきほどまでの無言は嵐の前の静けさだったのか、長髪をはじめさせた。

「ギョーム！このばかやろう！」

驚いたことに窘めたのはルイだ。

靡いた長髪は重力に従って落ちようとしない。彼の体内を巡る青い血が光はじめたのだ。アンリは改めてこの弟の中に秘められた激情に驚いた。

「あなたは許せない。父上のところに同じく旅立って謝りに行ってほしい。その後は、ルイ兄上が継承なさればいい……」

「ギョーム、何をばかなことを！！」

さすがに色を失うルイ。アデライードは言葉すら見つけられない。妹たち二人といえ、意外とマリアはまっすぐ兄と弟を見据えている。度胸あると見込んでいたロザリーヌは、母親同様の態度に落ち込んでしまっている。もはや、舌が全く動かないようだ。

アンリは、ただ一言。

「死ぬ気か？」

「その覚悟がなければ、剣を鞘から抜いたりしません」

ルイのように敬語を崩したりはしない。

従子爵家の継承予定者にしてみれば、この状況はかなり逼迫しているはずだった。だが、なぜか、心が安定していくのはどういうことか？

…あの方ならば認めてくれるはず…アンリの中で根拠のない確信が生まれつつあった。そして、もっと不可思議なことに、葬礼の場であ会った、あの正体不明の貴人の貌が映像として脳裏に浮かんできたのである。